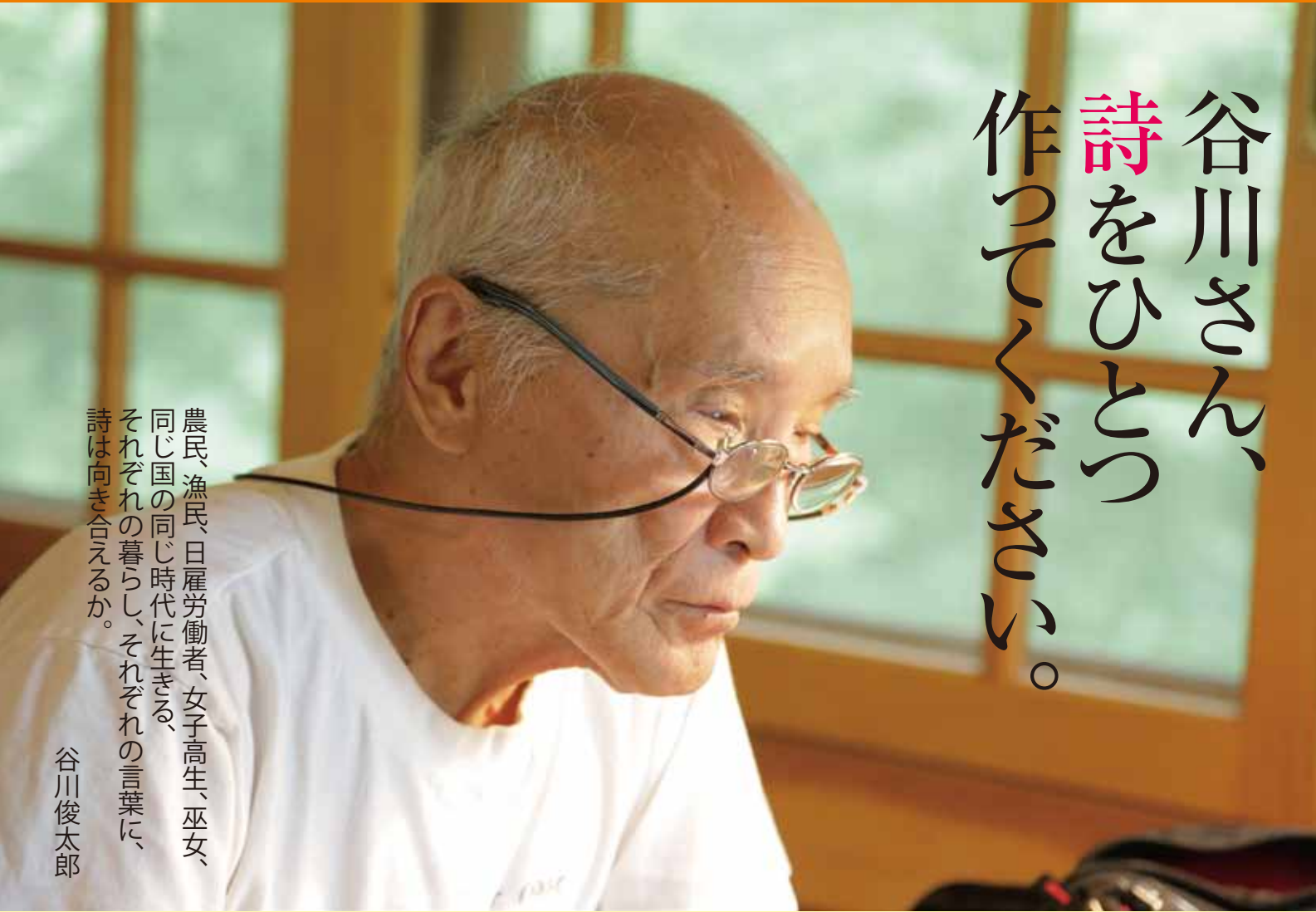


第39回 日本カトリック映画賞 授賞式&上映会



谷川さん、
詩をひとつ
作ってください。

農民、漁民、日雇労働者、女子高生、巫女、
同じ国の同じ時代に生きる、
それぞれの暮らし、それぞれの言葉に、
詩は向き合えるか。

谷川俊太郎

2015年 5月5日(火)
なかのZERO 小ホール
13:00開演(12:10開場)

チケット:1,000円

高校生以下、障がい者(介助者1名含む)
800円

授賞作品

第39回日本カトリック映画賞「谷川さん、詩をひとつ作ってください。」
第1回 シグニス平和賞「石川文洋を旅する」

13:00~日本カトリック映画賞及びシグニス平和賞授賞式

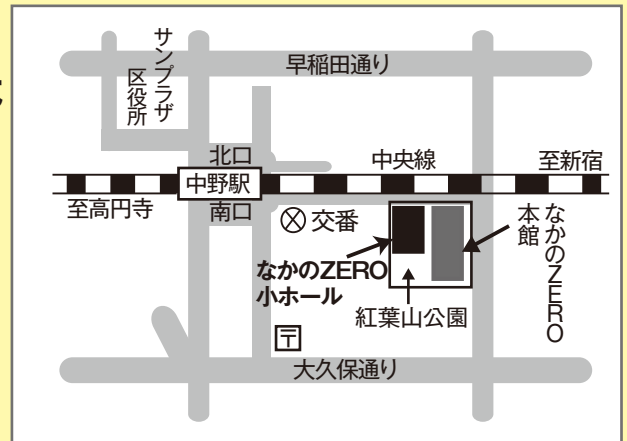
13:40~日本カトリック映画賞授賞作

「谷川さん、詩をひとつ作ってください。」上映
(授賞作品「石川文洋を旅する」の上映はありません)

15:10~休憩

15:30~杉本信昭監督+小松原時夫プロデューサー
+晴佐久昌英神父 鼎談

前売券販売 聖イグナチオ教会案内所 ☎03-3230-3509
スペース セント ポール ☎03-5981-9009
サンパウロ書店(四ッ谷駅前) ☎03-3357-8642
高円寺教会 天使の森 ☎03-5307-6680



JRまたは東京メトロ東西線中野駅南口から徒歩8分

主催 SIGNIS JAPAN
(カトリックメディア協議会)

後援 カトリック中央協議会広報

日本カトリック映画賞授賞作品

谷川さん、詩をひとつ作ってください。

“詩は人々の日常と向き合えるか”

詩人、谷川俊太郎。わたしたちは「鉄腕アトム」のアニメソンで、CMのナレーションで、教科書の中で、世代を超えて谷川さんの詩に触れてきました。みずみずしい言葉が紡ぎ出す宇宙は、不思議な力で私たちに惹きつけてきます。

“詩は人々の日常と向き合えるか”。谷川さんの創作の現場から、海、畑、学校、路上、そして神降ろしの場、いろいろな場所で生きる人々を追って撮影が続いていきます。生きる土地も世代もばらばらな人々の、それぞれの苦しみと喜び。彼らは自分の言葉で、時には谷川さんの詩で伝えようとしています。すると詩はさまざまな表情を見せ、被災地で、スイスで、高架下で、詩の言葉はひとり歩きを始め、そして谷川さんに戻り、やがて新しい詩が生まれます。

★オフィシャルサイト：<http://tanikawa-movie.com/>

監督：杉本 信昭

新潟県新潟市出身。1977年法政大学中退。以降フリーランスの劇映画助監督。1986年、シナリオ「燃えるキリン」執筆（未映画化）。以降フリーランスのPR映画・展示映像監督として活躍。1993年ドキュメンタリー映画「蜚気楼劇場、2003年ドキュメンタリー映画「自転車で行こう」を監督。2007年株式会社GEARSせつりつ。アニメーション映画「RED METAL」企画・製作開始（未完）。2013年羽仁進監督ドキュメンタリー「PARADOISE」編集。

プロデューサー：小松原時夫、住田望、編集・構成：村本勝(J.S.E.)、撮影：落合智成、ビデオエンジニア/現場録音：小久保 尚志、整音：湯脇房雄、音楽：谷川賢作、製作・配給：株式会社 モンターージュ ©2014 Montage Inc.

2014年/日本/カラー/デジタル/82分

シグニス平和賞授賞作品

石川文洋を旅する

青年は、いかにして戦場カメラマン“石川文洋”になったか

1938年沖縄生まれの石川文洋さんは世界一周無銭旅行を夢みて日本を脱出。64年から南ベトナム政府軍・米軍に従軍し、戦場カメラマンとしてベトナム戦争を世界に伝えた。そして68年末に帰国後今日まで、ふるさと沖縄の姿を記録し続けている。

本作は、75歳になった文洋さんと共にベトナムと沖縄を旅し、生立ちと青春とを見つめる。切り売りした命がけのネガフィルム、サイゴンの下宿、アオザイを着たスチュワートの神秘的な魅力、解放戦線兵士が眠る烈士墓地、幾世代にも及ぶ枯葉剤の影響。

2014年は文洋さんが従軍取材をはじめから50年の節目の年となる。その軌跡をたどるこの旅は、今という時代を生きる私たちに深く静かな思索へといざなっていく。

★オフィシャルサイト：<http://tabi-bunyo.com/>

監督：大宮 浩一

1958年生まれ。映画監督、企画、プロデューサー。日本大学芸術学部映画学科在学中より映像制作に参加。『ゆきゆきて、神軍』（87|原一男監督）等で助監督を務める。93年、有限会社大宮映像製作所を設立。主な企画・プロデュース作品に、『よいお年を』（96|宮崎政記監督）、『JUNK FOOD』（98|山本政志監督）、『DOGS』（99|長崎俊一監督）、『青葉のころ よいお年を2』（99|宮崎政記監督）、『踊る男 大蔵村』（99|鈴木敏明監督）等。

企画・監督：大宮浩一、撮影：山内大堂、加藤孝信、編集：遠山慎二、サウンドデザイン：石垣哲、製作：大宮映像製作所、配給：東風、©大宮映像製作所

2014年/日本/カラー/デジタル/109分

《日本カトリック映画賞授賞にあたって》

このような映画を見たことがない

谷川俊太郎の心に詩が誕生するところを、映画に撮る。

なんと無謀で、なんと胸ときめく企画だろう。これ以上に創造的なチャレンジがあるだろうか。

谷川俊太郎という詩人ほど、創造の秘密に深く関わってきた詩人はいない。実は、彼は詩を書くというよりは詩に書かされているのであり、彼こそは、ことばが世界を生み出すという創造の現場に仕える、ことばの祭司だからだ。

ヨハネ福音書は、その冒頭部分で、天地創造の秘密を語っている。

「初めにことばがあった」「万物はことばによって成った」

「ことばの内にいのちがあった」

ことばは世界を生み、ことばは人間を愛し、ことばは魂を生かす。

そんな透明な「天のことば」と、汚れと情熱を孕む「地のことば」のあわいを生き、天地を結ぶよう召された者が、真の詩

●日本カトリック映画賞とは……

SIGNIS JAPAN(カトリックメディア協議会)は放送・映画・視聴覚メディア・インターネット等のメディアを使って、キリストのよい知らせ(福音)を広めたいと望んで、活動しているカトリックの司祭、修道者、信徒、求道者の団体です。

「日本カトリック映画賞」は、前々年の12月から前年の11月までに日本で公開された映像作品の中から、カトリックの世界観と価値観にもっとも適

1976年 土呂久
1977年 ねむの木の詩が聞こえる
1978年 春男の翔んだ空
1979年 マザー、テレサとその世界
1980年 父よ、母よ
1981年 教育は死なず
1983年 この子を残して
1984年 国東物語
1985年 銀河鉄道の夜
こんいちわ地球家族
1986年 海と毒薬
1987年 ゴンドラ
1988年 火垂るの墓

1989年 黒い雨
戦場の女たち
1990年 ベンボスタ子ども共和国
1991年 あーす
1992年 阿賀に生きる
1993年 スペインからの手紙
1994年 学校
1995年 地球交響曲第二番
1996年 絵の中のまくの村
1997年 愛の黙示録
1998年 ユキエ
1999年 ナビィの恋
2000年 老親
-豪日に架ける- 愛の鉄道

2001年 GO
2002年 チョムスキー9.11
2003年 HIBAKUSHA—世界の終わりに
2004年 ライファーズ
2005年 村の写真集
2006年 博士の愛した数式
2007年 ひめゆり
2008年 おくりびと
2009年 風のかたち
2010年 月あかりの下で ある定時制高校の記録
2011年 エンディングノート
2012年 隣る人
2013年 先祖になる



SIGNIS JAPAN(カトリックメディア協議会)事務局

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 女子パウロ会内

E-mail:info@signis-japan.org

担当:大沼 携帯090-8700-6860

SIGNIS JAPAN顧問司祭

晴佐久昌英(カトリック東京教区司祭)

人なのではないか。それは本来ならば宗教の使命のはずなのだが、彼らの多くはいまや天のことばに勝手な色を塗り、地のことばを暴力で支配している。今、だれもが求めているのは、欲望も悲しみも愚かさもすべて含めて人間を普遍的に祝福することば、すなわち詩なのである。

映画の半ば、雑踏の中で詩を朗読する詩人は、廢墟の祭壇でミサを捧げる司祭のようだ。

見よ、聖なることばは、わが子を生み出そうとしている――。

映画の終わりには、各地で精一杯生きている一人ひとりに向けて、真の詩人から詩が溢れ出すという、奇跡の画面が現れる。そこに、自らが生んだ人間に、ことば自身が語りかけているのが確かに映っているのを見て、魂が涙ぐむような救いを感じた。天のことばに仕えるカトリック教会として、なんとしても感謝すべき映画だと感じた瞬間だ。

今まで、このような映画を見たことがない。

う作品にSIGNIS JAPANから贈られる賞で、今年で39回目を数えます。

この度新たに創設されたシグニス平和賞は、真の平和に向かって一歩踏み出す勇気を与えてくれる映画などを応援する目的で授与されるものです。

SIGNIS JAPAN <http://signis-japan.org>

SIGNIS ASIA <http://signisasia.org>

SIGNIS WORLD <http://signis.net>